

# 豊明希望チャペル礼拝

2022/11/27

ローマ人への手紙 6 : 3~4

「新しいのちに歩むため」

前回、私たちは、「罪の中に死んだ」私たちの事、クリスチャンとは、罪の中に死んでしまったものであって、今は、キリストの復活の命、天国に続く新しい永遠の命の中を生かされているのである事を教えられました。

その話しの中で、洗礼式、バプテスマのことについてお話ししました。

バプテスマには3つの意味があって、一つは生かす、一つは聖める、そして一つは死ぬと言うことだとお話ししました。バプテスマを受けたクリスチャンは、一度死んで、新しい命に生きるのです。

それを教えるのが、今日の箇所的主旨です。4節の言葉を読みます。

6:4「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいのちに歩むためです。」

6章7章でもパウロは強調しますが、洗礼とは死だということです。過去の罪の、古い自分が死ぬことだと。もう少し正確に見ましょう

「私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、」と言います。クリスチャンのバプテスマの時、何が起きているのでしょうか。パウロによれば、神を信じて救われた者は、一人で死んだのではないということです。「キリストの死にあずかるバプテスマ」キリストと共に死んだと言うのです。「あずかる」というのは、漢字では、参与の与です。キリストの死に参与する、一緒に死ぬということなのです。

今までの、ローマ人への手紙の文脈で言うと、アダムとイエスの関係性の中で説明してまいりましたが、パウロの頭の中には、5章を思い起こしていただきたいのですが、人間の祖、アダムが罪を犯したとき、私たちも、アダムと共に罪を犯した、一蓮托生(いちれんたくしょう)と言いましょか、原罪と言われる罪の根本、根っこを、私たちも生まれつきもってしまったと言う事、すなわち、アダムの死に連なってしまって、アダムが、罪の結果の死を迎えるように、私たちも、アダムと共に死ぬことになってしまったという神の経緯をパウロは解き明かしてくれたのです。

そして、洗礼を受けることによって、いわば第二の死と言いましょか(byバルト)、キリストに連なる霊的な死を洗礼において体験し、キリストに連なる死ですので、バプテスマの時、キリストに連なったのです。イエス様がよみがえるとき、イモを掘り出すと、他のイモも、まさにイモずる式に掘り出されてしまうように(私のオリジナルの例え・・・)、キリストと一緒によみがえることになるのだというのが、「キリストの死にあずかるバプテスマ」の意味なのです。

それで、続きの「それは、キリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいのち(いのちにあって新しい歩みをするためです)

に歩むためです」となるのです。この言い方には注意が必要です。

第3版の聖書では、「私たちも、いのちにあって新しい歩みをするためです。」とありますが、改定されて、「新しい命に歩むためです」となりました。同じ事を言っています、ズバリとしていて、わかりやすいです。すなわち、クリスチャンは、一度バプテスマによって死んだのですから、救われてからの今の命は、自分では気づかないけれど、新しい命だということです。それは永遠性をもった命です。永遠の命です。アダム以来の、有限な命ではありません。肉体の命は見た目はなくなりますが、この命に生きている状態だと、この命を尻目に、天国へと何事もなかったように、移行する命なのです。わたしたちは、その命に生きていると言うことであります。

そういえば、クリスチャンになってから、命が新鮮な感じがしていた・・・といういい方をされる方があります。錯覚でしょうか。いや、実際そうなのです。

私は、ある兄弟のことを思い起こします。彼は77歳で召されました。

彼は、その前に、愛する娘さんを天に送られたのです。娘さんが、ご家族で最初に洗礼を受けられ東京キリスト教大学を出られて、礼拝の奏楽者でした。その後、結婚され、彼女は40代で召されたのです。

彼は、死ぬ直前に、先に召された、(娘)〇〇が呼んでいる、墓に行こうと言われて、一緒に洗礼を受けられた奥様と一緒に、墓にいて祈ってきたんですと、言っておられて、死を予感されていたのかも知れません。

兄弟が、洗礼式で読まれた信仰告白にはこうありました。

一部を、そのまま読んでみます。「我が家では娘〇〇がキリスト教を学び始めクリスチャンへの道を歩み出し、私ども夫婦にも信仰をすすめるようになりました。どんな成り行きからか分からなかった私ども夫婦との間でよく口争いを致しました。そのうち私ども夫婦にもあまりに熱心な娘のすすめもあり聖書を手にするようになりました。娘からすすめられる以前は偶像礼拝者ともまではいいていませんでしたが、神社、寺などにはよく行きました。つまり偶像のある所でした。しかし、聖書をひもとくに従って『愛は寛容であり、親切です。人をねたまず、自慢せず、高慢にならず、また礼儀に反せず、自分の利益を求めず、不正を喜ばず、真理を喜びます。いつまでも残るのは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているものは愛です。』(Iコリントより引用)これらの教えを聖書から学び、この道への追走をさせてくれた、娘〇〇に感謝し、私どもが将来入る墓に愛という字を刻みました。分骨し入れてあります。今考えてみれば、〇〇の生きているうちに判走がなぜ決断できなかったのか?と反省しています。・・・自分自身を振り返ってみると、まだまだ信仰から出発していない、つまり信仰が足りないのではと感ぜられます。・・・神を受け入れた人々の仲間入り、すなわち神の子供とされる特権を与えて下さるよう、ねがわずにはいられません。そして血によってでもなく、肉の欲求や人に意欲でもなく神によって生まれたのであるから、祈り続けてゆき、これから生きていく歩みの中で生きるなら主のために生き、死ぬなら主のために死ぬのです。『生きるも死ぬも私は主のものです。』と確信できるように早くになりたいと思っています。2011年12月1日MY」と。そして、願い、信じて洗礼を受けられました。

「生きるなら主のために生き、死ぬなら主のために死ぬのです。『生きるも死ぬも私は主のものです。』と確信できるように早くなりたいと思っています。」

主のために、死んだ。生きるのも死ぬのも私は主の者です。すなわち、主のもの、主に連なる者として、娘さんに導かれ、伴われ、そして、ついに主に根こそぎ、引きずられて、天に召されたと思うのです。

4節を先に読みました。3節から4節を併せてお読みします。

「6:3 それとも、あなたがたは知らないのですか。キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たちはみな、その死にあずかるバプテスマを受けたではありませんか。6:4 私たちは、キリストの死にあずかるバプテスマによって、キリストとともに葬られたのです。それは、ちょうどキリストが御父の栄光によって死者の中からよみがえられたように、私たちも、新しいいのちに歩むためです。」

「あなたがたは知らないのですか。」とパウロは言います。知っているはずですよという意味です。何を知っていると言うのでしょうか。「キリスト・イエスにつくバプテスマを受けた私たち」という部分のことだと思われまます。芋づるの写真ではありませんが、他のイモに連なっている。すなわちキリストに連なっているということです。キリストに連なる実のように、有機的な結合と言いましよう、生命共同体のように、キリストの命を私の命とするように連なっている。だから、「私たちも、新しいいのちに歩む」というのです。

もっと強調すれば、今、皆さんが見ている、私は私ではないのです。古い林桂司は皆さんの前にいません。いますが、私の中を流れている命は、天の命なのです。みなさんとはもはや住む世界が違います。あ、みなさんも、天の命に生きているのですね・・・そういう事です。もちろん、皆さんもですが・・・

パウロは、ここから、新しい人生が始まる、新しい人生観、そしてその人生を生きる倫理観、道徳観をもった人生が始まると、パウロは、7章にかけて、新しい人生に紐付けられた、新しい人生観に基づく、道徳論、倫理論を展開していくのです。

パウロは、私たちに、洗礼を受けた者にふさわしい生き方、新しい命に連なるものとしての生き方をせよとここを締めくくるのです。

ロシアのハバロフスクで、伝道しておられるロシア人のスベトラーナという女性の牧師がいます。今もかの地で伝道をしておられますが、彼女のミニストリーは、貧しさのゆえに、行き場を失った子供たちのためにケアと伝道です。

以前の教会で彼女に献金を送っていましたが、手紙をいただき、その献金に対する挨拶に加えてこのように書かれていました。

それは、たぶん、彼女が、生涯独身で通し、ひたすらその命をささげた、彼女の使命である孤児達にいつも語っている説教の内容ではないかと感慨深く読ませていただきました。この言葉には、彼女の渾身の力を込めたメッセージが込められているように感じました。すなわち。

「私たちが道に迷ったとしても、途方に暮れることはありません。天の父がご自分のほうから、わたしたちを探し出してください。なぜなら、天の御父は、道だからです。私たちは、天の御父と共に永遠に生きるでしょう。なぜなら、天の御父はい

のちだからです。私たちは愛するようになるでしょう。なぜなら、天の御父は愛だからです。私たちは、見捨てられて孤児のようになることはありません。なぜなら、天の御父は、真実なお方だからです。私たちに必要なのは、天の御父に信頼してゆだね、天の御父に学ぶことだけです。」

今、教えられております、ヨハネの福音書のイエス様のメッセージは、最後の一週間のメッセージであり、弟子達への告別説教でもあると、先週お話をしました。そして、それが、また著者ヨハネの遺言でもあるとも言いました。

イエス様は、このようにおっしゃいます。私は、去って行く。しかし、私はあなた方を孤児にはしない。聖霊が助け、私は、いつもそばに居て、あなたがたの祈りを聞いている。聞いていて、その場で働くこと。

ヨハネの福音書 14:18ff 「14:18 わたしは、あなたがたを捨てて孤児にはしません。あなたがたのところに戻って来ます。14:19 あと少しで、世はもうわたしを見なくなります。しかし、あなたがたはわたしを見ます。わたしが生き、あなたがたも生きるようになるからです。14:20 その日には、わたしが父のうちに、あなたがたがわたしのうちに、そしてわたしがあなたがたのうちにいることが、あなたがたに分かります。」

それは、スベトラーナさんの確信でもあるのだと思います。

「新しい人生観に基づく、道徳論、倫理論・・・パウロは、私たちに、洗礼を受けた者にふさわしい生き方、新しい命に連なるものとしての生き方をせよとここを締めくくる」と言いました。

キリストがされたから、キリストに連なるものとして、私も同じ事をする。

彼らを孤児にはしない。孤児であるままにはさせない。私は彼らのためにつくそう。それが、ここで、パウロが言う、彼女の場合の「新しい命に連なるものとしての生き方」なのだろうと思います。

彼女は孤児達に、いつもこのように語っているのでしょうか。キリストに繋がれている者は、孤独ではない。もはや孤児ではない。あなたがたは、神の家族です。私と共に、キリストと共に家族です。「私たちは、見捨てられて孤児のようになることはありません。なぜなら、天の御父は、真実なお方だからです。」との確信のもとに生きる、そのミニストリーは、彼女の生き方なのだと思うのです。

今朝、バプテスマを受けた、キリストにつながった、新しい命に生きる、私たちにとっての生き方とはどのようなものになるのでしょうか。

よく黙想したいと思います。

今週の歩み。その「いのちにあって新しい歩みを」し、キリストに連なるものとして、キリストの良き香りをこの世に放ち、希望を、少しでも分かち合える者として、新しい歩みを、自分に対しても、多くの人たちのためにもしていけるように、感謝と讃美の歩みをここから歩み始めてまいりましょう。祈ります。